

～インド神話を楽しもう～

インド神話集 ナイミシヤの森 VOL.1

乳海の攪拌伝説と聖鳥ガルダの物語

乳海の攪拌

それは遙か昔の物語である。一燃えるように輝かしき大きな山があった。その名は、メール山。降りそそぐ太陽の光は、まばゆく撒き散らされ黄金色の衣をこの山にまとわせた。その山は、高い木々や様々な薬草で満たされ鳥のさえずりが美しく響き渡っており、神々は聖地としてよく訪れた。しかし、頂上への道はなく、山中には猛獣がうようよと歩き回っているため、多くの罪を背負った人間には近づくこともできなかった。いわんや、心に想像をめぐらしてもメール山には近づくこともできなかった。

さて、そのメール山の黄金の頂きに、真剣な表情で集まった神々達の姿があった。苦行と誓いをつらぬく神々は、甘露(アムルタ)を求めてやって来ていた。「どうしたら、不老不死を得るための甘露を得られるのだ！それは、いつ、どうやったら手に入るのか？」このような神々の相談を天界から目にしたヴィシュヌ神は、傍にいたブラフマー神様に告げた。

「なあ、ブラフマー神よ、もし甘露を彼らが手にしたいならば、いっそのこと彼ら神々(デーヴァタ)とアスラ達共々で、乳海を攪拌すればよかろう。そうは、思うんか？そうすれば、甘露だけでなく、あらゆる薬や宝玉を彼らは得るであろう。さあ！神々よ、乳海を攪拌し、甘露を得るがよい！」

この言葉を聞いた神々とアスラ達は、歓喜の声をあげた。しかし、どうしたら乳海を攪拌することができるのか？

「このメール山を乳海へ落とし、攪拌棒の代わりにして、デーヴァタとアスラに分かれて引き合ってみなさい。」

ヴィシュヌ神の思いを受け、神々とアスラ達は、メール山をあらためて見た。メール山は、上方へ1万1千ヨージャナ(1ヨージャナ＝約12km)ほどそびえ立ち、それだけでなく、下方へも同じく1万1千ヨージャナ地下深くもぐっている。さすがの、神々やアスラ達もその偉大な山を根こそぎ掘り出すことはできなかった。彼らは、ヴィシュヌ神とブラフマー神のもとへ飛び一緒に座られている二人へ懇願した。「ああ、偉大なる創造神よ！どうか手段をお与えください。我々の幸のため、メール山を根こそぎ引き抜くにはどうしたらよいでしょう？」

ヴィシュヌ神とブラフマー神様のお二人は、「よろしい、そのようになるであろう！」と言い彼らの願いを承服した。そして、蓮の花弁のような目を持つヴィシュヌ神は、蛇族の王アナンタにその厳しい仕事を託した。創造神の言葉を受けた剛力で知られた蛇王アナンタは、奇跡の力でメール山を根こそぎ一気に引き抜いた。

歓喜の声をあげながら、蛇王アナンタと共に、全ての神々とアスラ達は、乳海の岸へ集まり、海に向かって叫んだ。

「おお！乳海よ。我々は、甘露を得るために、お前を攪拌しようと参った。」

「わかりました。創造神の恩恵と慈悲により、皆様に甘露が得られますように、私もお祈りいたします。ところで、その甘露の分け前を私にも頂けますか？もしそうならば、この乳海の水がマンダラ山によって攪拌されて起きる途轍もない震動にも、私は耐えられますから。」

「もちろんだ！」

乳海の願いを承諾すると、神々とアスラ達は、次に亀王へ頼んだ。この亀王は何をかくそうヴィシュヌ神の権化である。

「亀王よ！乳海の中でメール山を攪拌するには、どうしても土台がいるのです。申し訳ないが、あなたの甲羅の上でメール山を支えてもらえぬか？どうかこの難題を我らのために引き受けてくれ。」

亀王は、同意した。これを受けインドラ神は、その手に持つ雷を起こす武器バジルユダを使って、亀王の背中にメール山が固定できるようにならし山を亀王の背に据えた。さらに、神々とアスラ達は、攪拌の支柱となったメール山に、大蛇ヴァースキーを巻き付けて縄がわりにして双方から引き合うことにした。



さあ、伝説の乳海の攪拌がいよいよ始まった。悪鬼達は大蛇ヴァースキーの頭側を、神々は、その尻尾側を持った。

すさまじい力で引き合う神々とアスラ達！途轍もない衝撃を受け、大蛇ヴァースキーの口からは、炎と黒い蒸気が昇った。人間の力など遥かに及ばない彼といえども、さすがに長い時間をかけ物凄い力で引き合えば疲れもでてくる。しかし、大蛇の口から吐かれる黒い蒸気から雷雲ができ、そこから降った雨が、疲労した彼らを活気づけた。さらに、メール山にはえる薬草も零れ落ち、それらが神々や悪鬼達を癒した。巨大なメール山がグルグルと回り、海水は渦となった。その中で、もみくちゃとなって息絶えた様々な水棲生物は、乳海へ溶けていった。

降り注ぐ雨がたまった乳海は、まさに雨神ワルナの住まいである、今や、そこは地獄の様相であった。メール山の旋回は、その山に茂った大木がこすりあわせ根元から裂き、そこに住む獅子、象、その他の生類達は、焼かれていったり海に落ちたりして、死んでいった。インドラ神は、激しい雨を降らせ、燃えさかる炎を鎮めた。火によって溶けだした種々の巨木と草の樹液は、乳海の水へと混じっていった。神々は、この滋養に満ちた乳海の水を飲み、英気を養った。また、そして、攪拌された乳海は、鉱物や樹液の恵みにより、次第にギー(精製バター)をうみだした。しかし、彼らとて、その力には限度がある。

「ああ、いつまでこの引き合いを続ければよいのだ？もうだめだ。どうか、ブラフマー神様よ！お助けください。」

「よし、ではヴィシュヌ神へ君達の力になるよう頼んでみよう。」
ブラフマー神からの頼みを聞き入れ、ヴィシュヌ神は、彼らの力になるよう約束した。

「私は、皆の者、全てに力を与えよう。さあメール山を回し乳海を攪拌し続けなさい。」

ヴィシュヌ神の言葉に発奮し、神々達は、攪拌を続けた。すると、乳海から柔和で輝かしい光を放つ月が現れた。続いて蓮に座し白い衣を纏った女神ラクシミー、酒の女神(スラー)、駿馬ウッチャイシュラヴァス。が出現した。さらに、ヴィシュヌ神の胸を飾る宝珠カウスツバや、全ての願いを叶える神牛スラビーが現れた。そしてついに、アーユルヴェーダの始祖とも崇められるダンヴァンタリ神がその手に壺を持って出現された。その壺こそ、万人が求める甘露が入っていた。



この光景を目にした悪鬼達は、甘露に大騒ぎし、「それは、俺たちのものだ！」と瞬間に奪い取った。



しかし、乳海の攪拌は、まだ続いていた。あろうことか、そこから全世界を滅ぼす猛毒ハラハラが出現してしまった。それは悪臭を放ち、拡散すれば三界は、ひとたまりもない。見かねたブラフマー神は、シヴァ神へ相談した。すると、慈悲深いシヴァ神は、猛毒を飲み込んで喉に止め、生類を救った。以来、シヴァ神は、ニーラカンタ(ニーラ=青、カンタ=首)と呼ばれるようになったのだ。

甘露を奪い取ったアスラ達も、シヴァ神の救済などを見て、ますます嫌悪と敵意を燃やした。ヴィシュヌ神は、甘露をなんとかして奪い返そうと一計を案じ、幻惑の力(マーヤー)によって、うっとりするような女性の姿に変身した。そして、酒を酌み交わし甘露を得て大喜びしている彼らのもとへ近づき戯れ始めた。ヴィシュヌ神が変化した美女に完全に魅了された愚かな悪鬼達は、うっかり彼女の手で甘露の入った壺を渡してしまった。その瞬間、美女は甘露と共にスッと飛び去ってしまった。

「しまった！騙された、追え、やつを終え！」

アスラ達は、強固な鎧と武器を持ち、ヴィシュヌ神のあとを追った。

ヴィシュヌ神は、甘露の入った壺を神々のもとへ持ち帰った。喜びと安堵に満ちた神々は、静かに一列に並び座った。ヴィシュヌ神は、彼ら一人一人に甘露を分けていった。

しかし、その場を目撃していたアスラが一人いた。それがラーフである。彼は、敵であるデーバタの姿に化け、ばれない様にこっそり横に座った。そして、何も知らないヴィシュヌ神は、彼にも皆と同じように甘露を分け与えた。

「しめしめ、うまいこといった、遠慮なく甘露を頂くとしよう。」

ラーフが手にした甘露を口に運んだ。その瞬間である。月神と太陽神がラーフの正体を見破った。

「あいつは、アスラ、ラーフだ！」

時をうつさず、ヴィシュヌ神は、自らの武器である円盤で、甘露を口にした悪鬼ラーフの頭を見事に切り落とす。ラーフは、あと少しの所で甘露を飲み込むことができなかった。無残にも円盤で切り落とされた巨大な悪鬼の頭は、悲鳴をあげる間もなくころげ落ちた。その日以来、ラーフと月神、太陽神の間には、強烈な敵意が生まれ、それために、空へ昇ったラーフの頭は、月神と太陽神を飲み込み月食や日食を作り出すことになったのである。

甘露を奪われた悪鬼達は、ヴィシュヌ神や神々が許せず戦いを挑んだが、かなうはずもなかった。勝利を得た神々は、攪拌棒となったメール山に感謝をささげ、元の場所に戻し、勝利の雄叫びを天界にとどろかせた。天界へ戻った神々は、絶大なる配慮をもって甘露を貯蔵し、容器を作り直し、アスラとの闘いで活躍した“ナラ(※人間の意味)”へ全てを委ね預けた。

こうして、乳海の攪拌により様々なものが出現したが、その中の一つ駿馬ウッチャイシュヴァラスにまつわる物語がある。聖鳥ガルダが、活躍するこの物語は、蛇族の因果応報にも関係している。

聖鳥ガルーダの誕生

神々の時代、創造神ブラジャーパティの娘である美しい姉妹がいた。二人の名前は、カドゥルーとヴィナターといった。姉妹は共に容姿に恵まれてはいたが、何故かしら、お互いに常に対抗心をもやしていた。そして、姉妹は、そろって聖仙カシャパの妻となった。創造主にも等しい力を持つ聖仙カシャパは、二人に満足し、どんな願いも叶えると約束した。するとカドゥルーは、「素晴らしい千匹の蛇が息子に授かりますように…」と願った。これを受けヴィナターは、「威光と武勇の点でカドゥルーの息子より優れた二人の息子が得られますように…」と夫であるカシャパに願った。偉大なる聖仙は、二人の願いを叶え「退治を大事にしてください」と告げ姉妹を残し森へ入っていった。

長い年月を経て、カドゥルーは、千個の卵を産んだ。一方、ヴィナターは二個の卵を産んだ。二人が生んだ卵を蒸し器の中で500年貯蔵した後、カドゥルーの卵は全て孵化した。しかし、ヴィナターの二つの卵からは子供が生まれなかった。息子を求めるあまり、そして姉に負けたと思った哀れなヴィナターは、一つの卵を割って息子を取り出した。しかし、その子は、上半身は備えていたが、下半身はまだ顕れていなかった。生まれた子は、母に文句を言った。

「あなたは、自分の哀れな心に負け、私が産まれてくるのを待てなかったのでしょうか。故に、五百年間、あなたが競っているカドゥルーの奴隷となるでしょう。しかし、もう一人の息子が、あなたを解放するでしょう。どうか冷静になってお待ちなさい。せめてこの後、五百年は、お待ちなさい。」

このように告げ、アルナ(=紅)は、天に昇った。後に語られるが、このアルナは、創造神ブラフマーの命を受け、太陽の行く前をいつも走る者となった。故に、太陽が昇る前に空が紅くなるのは、彼のためとされているのである。

ヴィナターは、息子の言葉を守り、もう一つの卵は、自然に孵化するまで放っておくことにした。

ある日のこと、姉妹は、乳海が攪拌され沢山の素晴らしいものが出現したことを知った。その時、出現したには、駿馬ウッチャイシュヴァラスのことを知り、カドゥルーは、妹に質問した。

「乳海から出現した馬色は、何だと思う？ 早くお言いなさい。」

「あれは、馬の王！ 私は白い色だと思うわ。あなたは、どう思うの？ 色を言って、賭けましょうよ。」

「あらまあ、面白そうね、いいわよ！ じゃあ、私は、尻尾が黒い馬だと思うわ。いいわね、賭けよ、間違ってる方は召使いになるのよ。」

「じゃあ明日、馬を見に行きましょう」

絶対に負けたく無い一心の)カドゥルーは、ヴィナターを欺くため、自分の息子である千匹の蛇へ、黒い毛となるように命じた。彼らが、素速くその馬の尻尾を覆えば、自分は賭けに勝つと考えたのだ。

しかし、いくら母親の命令でも、そんなことをするは嫌だ！ と反抗した息子達もいた。それに怒ったカドゥルーは、あろうことか、その蛇達へ呪いをかけた。

「いいかい、よくお聞き！ 私の言うことを聞かないお前達は、遙かこの先に執行されるパーンダヴァ族の末裔、王仙ジャナメージャヤの蛇犠牲祭祀の護摩の炎で、焼かれることになるわよ！」

理不尽なこの呪いの言葉は、創造神ブラフマーの耳にも届いた。カルマに後押しされたカドゥルーから発せられた極めて無慈悲な呪いであるが、ひとたび発せられた後には、消すことはできない。況や、創造神は、この世界に蛇が桁外れに増えるのを見て万物への配慮から、この呪いをも認めたのだ。

「毒を持ち、強力で、咬みつくという性質を考えれば、蛇族の母の呪いは、全ての創造物にとっては、助かることである。カルマは、常に、他人の死を欲する者達に、死を課するのだ。」

創造神ブラフマーは、カドゥルーの言葉を承諾し、夫である聖仙カシャパを呼び、次のようにも伝えた。

「おお！汚れ無き者よ！力溢れる者よ！毒を持ち、巨大な体を持ち、生まれ持った咬みつく性質の蛇達が、母によって、呪いをかけられた。おお、息子よ、聖仙カシャパよ！しかし、お前は、それに取り分け哀れみを向けることはないぞ。ジャナメージャヤ王の蛇犠牲祭祀における蛇族の因果は、伝説として語られていくのだ。」

創造神の言葉を聞き、聖仙も納得した。

さて、母カドゥルーの命令に従おうと決めた息子達は、次のように考えた。

「もしも、母の思いが叶わねば、我ら息子達への愛など捨て、全てを燃やしつくしてしまいかねない。しかし、もし、母の思いが叶った時には、その命令を嫌って逆らった兄弟達を慈悲によって、きっと許すに違いない。よし！我々は、迷うことなく馬の黒い毛となろう！」

息子達は、先回りして、駿馬ウッチャイシュラヴァスの尻の毛にまわりつき、母とヴィナターが来るのを待った。

賭けをした姉妹は、馬の色がどのようなものであるか期待しながら、大海の反対側へ胸を踊らせて進んだ。荒れ狂う大海もあつという間に渡り切り、あの馬のもとへ到着した。

月の光のような白い色をした最高の馬、しかし、(尻尾は、)黒い毛でした。そこにふさふさとした黒い毛を目にした時、カドゥルーは、召使いとなるヴィナターを大変に落胆させたのです。その馬の本当の色は白いのだが、カドゥルーの蛇の子供たちが覆っているため、それは黒い色に見えていた。

「私の勝ちね。さあ、あなたは、これから私の召使よ。」
勝ち誇るカドゥルーを前に、ヴィナターは青ざめ落胆した。

ヴィナターが奴隷になってから、長い時が過ぎた。そして、ヴィナターが産んだもう一つの卵が、誰の助けも借りずに自然に割れた。するとそこから聖鳥ガルーダがした。ガルーダは、宇宙の隅々へ光を放ち、強く、望んだ場所へ飛び、自由に行為できる。聖鳥は、世紀末の炎と同等の輝きを持ち、両目は、雷の閃光のようにきらめいている。ガルーダは、生まれるやいなや巨大な鳥となって空へはばたいた。その姿に神々は感嘆の声をあげ次のように称賛した。

「おお！鳥類の神よ！あなたは、聖仙であり、祭祀の殆どを執り行う者であり、神なる存在。あなたは、支配者であり、熱光線を放つ太陽であり、創造神なり！あなたは、インドラ神であり、ハヤムカ神(馬の顔を持つ神様、ヴィシュヌ神の権化)であり、神矢(=ジャラハ。ヴィシュヌ神が敵を倒すために矢に変化して倒した伝がある)、宇宙の支配者であり、創造神ブラフマーであり、アグニ神であり、風神であられる。

あなたは、運命の制定者データ、ヴィデータであり、神々の中でも最高のヴィシユヌ神であり、常に栄光に輝く守護神であり、永遠なる甘露である。あなたは、太陽の活力であり、知性の働きであり、偉大なる守護神であり、強靱の大海であり、純粹なるものであり、いかなる属性をも超越したものであり、感覚器官で捉えられない暗闇のようでもあり、怒りの保持者であり、無敵なるものであられる。あなたは、自から全てを生じさせ、類い希なる行為者であられる。あなたは、無顕現なるもの全てであり、顕現なるもの全てであられる。あなたは、純粹な知識であり、太陽の光のように活動するもの、無活動のものを表明しておられる。あなたは、太陽の輝きを落とさせ、全ての破壊者となられる、あなたは、崩壊するもの全てであり、崩壊せざるものの全てである。おお！神様！あなたは、炎の輝きにより、全てを飲み込まれる、あたかも太陽が怒り万物を焼き尽くすかのように！あなたは世紀が変わる時、万物の崩壊の時、炎のように立ち上がり全てを破壊する。

おお！鳥類の王よ！我々は、あなたのもとへ参り、庇護を求めます。あなたは、空を飛びまわり、あなたの熱力は、壮大であり炎のように強大なのです。あなたの輝きは、雷鳴のよう。あなたは、闇を追い散らすもの、(天高い)雲に届く。あなたは力強い聖鳥ガルーダ！あなたは、因果であり、恩恵の分配者、武勇において無敵であられる。おお！神様！宇宙全体が、熱せられた金のように、暑くなっていました。高貴な神々を守り賜え、恐怖におののく我らを…。あなたは、天界のどこへでも飛び回られる。おお！鳥類で最高のものよ！あなたは、慈悲深く、高貴な魂を持つ聖仙カシャパの息子であられる。あなたは、全ての支配者、故に宇宙に対して怒りを鎮め、慈悲を与えたまえ。あなたは、崇高なる神であられる、故にあなたの

怒りを鎮め、我らを救いたまえ。

おお！聖鳥よ！十の方位（東西南北、上、下）、空、天界、地、我々の心は、あなたの雷鳴のような大音声に、常に震えているのです。あなたの炎のような身体を、どうか小さくしてください。我々の心は、怒るダルマ神の如きあなたの輝きに、平静を失っております。おお！鳥類の王よ！我々は、あなたに祈ります。我らに優しくあられますように。おお！バガヴァナ（炎を持つもの、聖鳥ガルーダの別名）！我らに、幸運と果報を与えたまえ！」

全神々と聖仙達からこのように礼拝され、ガルーダは、その身体の熱力と光輝を落とし身体を少し小さくした。

聖鳥ガルーダは言った。

「これで、だれも私の身体を恐れる必要はない。この私の姿に驚愕する者がいれば、私は、また身体を小さくするだけだ。

さて、これから私は、母ヴィナターのもとへゆくとしよう。それから私には、先に卵から生まれた兄のアルナがいる。創造神ブラフマーはおっしゃっていた。太陽神がなにやら怒っていらっしやると…。明日の日の出には、世界を焼き尽くすほどの熱をもって上がってくるらしい、そこで巨大な私の兄アルナを太陽神の熱を覆ってやわらげるように日の出前に彼を東へ連れて行って欲しいと言われるのだ。」

ガルーダは、アルナをその背に乗せ、早速、東へ向かった。

太陽神の怒りとは、如何なるか？それは、次のようなものであった。

既に語られたように、乳海を攪拌して得た甘露を神々が、順に分け与えられて飲んでいるとき、そこへ変装して紛れ込んだ悪鬼ラーフ

がいたのを皆さんも覚えておられるだろう。太陽神と月神にその正体を見やぶられ、ヴィシヌ神に首を切られてからというもの、彼らにひどく敵意を抱いていた。

天に昇った悪鬼ラーフは、ある時復讐のため太陽神を貪り始めた、それが人間界で言う所の日食である。太陽神は、悪鬼ラーフに侵されているこの状況に、こみ上げる怒りを覚えた。

「この私が、悪鬼ラーフに食われている。何故だ！何故誰も助けてくれない。私の光は、すべての源だ。実の所、ラーフの怒りの力も、奴の私への敵対心も、全て私の熱と光から生じている始末だ。こんな理不尽なことがあるだろうか？日頃、私のこの光は、神々へ利益となっているはずだ…、しかし、この私が窮地にあっても、光の滋養を授けている者達からは、どんな助けも得られない。天界の住人達は、私が貪られているのを目にしても無関心を装い、私に対する悪鬼ラーフの非道を許しているのだ。

ああ、それならば、こんな理不尽な世界は、破壊した方がまだ！これについて、私は、なんら間違っていないはずだ。」

太陽神は意を決し、夕刻、西の山脈へと進み沈んでゆきながら、世界を焦土と破壊すべく熱線を乱射し始めた。

この苦境をなんとかするため、偉大なる聖仙達は、神々のもとへゆき訴えた。

「今日の真夜中、万物は恐怖に陥るでありましょう、明日の日の出には、太陽神の怒りの熱光線により、この世界が焦土と化してしまうのですから…」

自分達の手に負えない問題を相談するため神々は、聖仙達を連れて創造神ブラフマーのもとへ行き懇願した。

「今夜の、この途轍もない恐ろしき暑さは、一体どうしたことでありましょう。太陽神は、未だ昇ってはいないというのに…。明日の朝、彼が、昇って来たならば、一体どうなってしまうでしょう…。まずもって、世界の破滅は、明らかなこと！ああ恐ろしや」

創造神ブラフマーは、微笑んで答えた。

「太陽神は、今まさに、世界を破壊すべく、日の出の準備ができておる。さすれば、この世界の全ては灰とかすであろう。しかし、案ずることは無い。私は、あらかじめ救済策を用意した。それは、アルナだ！聖仙カシャパとその妻ヴィナターの賢い息子アルナは、大変な巨体をしておる。その彼に、太陽神の面前に据え、馬車をかる御者のように座らせるのだ。太陽の進むその前を巨体なアルナが遮れば、太陽神の熱力も和らぐであろう。これが、この世界、聖仙達そして神々への最善策だ。アルナは、太陽神の御者として人々に誉めそやされるであろう。」

聖鳥ガルーダは、兄のアルナをその背に乗せ、太陽神が登る前に東へと飛び立ち、そこで彼をおろした。アルナは、この創造神ブラフマーの思索通り御者の役目を果たした。これによって、怒りに満ちた太陽神のその強力な輝線から世界は救われたのだ。

母のもとへ飛ぶ聖鳥ガルーダ

力強く、活力に溢れ、そして、意のままにどこへでも飛んでゆく聖鳥ガルーダは、広大な海の反対側にいる母のもとへたどり着いた。母ヴィナターは賭けに負け、姉カドゥルーの召使いとなり、大変な苦悩に苛まされて、毎日を過ごしていた。

そんなある日のこと、カドゥルーは、自分に屈服した惨めなヴィナターを呼び、彼女の息子であるガルーダの面前でこう命じた。

「従順な召使ヴィナターよ！蛇族である私の息子達に相応しい深い海へ、美しく、魅力的な住処へ、私を連れてゆきなさい。」

言いつけ通りの出発をするためヴィナターは、蛇族の母カドゥルーを自分の肩に乗せた。同じようにガルーダも母ヴィナターの頼みにより、自分の背にカドゥルーの息子達である蛇達を沢山乗せて飛び立った。ガルーダが飛ぶ時は、いつも太陽神に向かって上昇してゆく。

しかし、ガルーダの背には、光に慣れない蛇達が乗っていた。強烈な太陽の光に熱せられた蛇達は、全員失神した。息子達の窮状を救うため、カドゥルーは、たまらずインドラ神様へ祈りを捧げた。

カドゥルーが息子を守るため、インドラ神へ祈る

「私は、あなたへ礼拝いたします。おお！神々の王インドラよ、私は、崇拝いたします。悪鬼バラに勝利した方よ！おお、悪鬼ナムチを退治した方よ！千の目をもつ神様、女神シャチーの夫よ！私の息子達を救い賜え、太陽神の光線郡に虐げられた者達へ、あなたの雨によ

り祝福を与え賜え！あなたこそは、偉大なる守護者！おお、最高の神よ！あなたは、きつと雨を振り注いでくださるでしょう。

あなたは、風神であられ、あなたは、雲であられ、あなたは、火神であられます。あなたは、空に雷をおこし、雲を駆り立てる方、それゆえに、偉大なる雲マハーガナと呼ばれております。あなたは、比類のない雷、怒号をあげる雲、大帰滅の恐ろしい雲バラーハカ、あなたは、創造者であり、世界の破壊者、そして、無敵なる方！あなたは、万物の光であり、神々の母アディティ女神の息子であり、光輝なる太陽神ヴィバーヴァスであり、最高の真理ブータである。あなたは、優等であり、王であられる。そしてあなたは、神々の中で最高の方であり、ヴィシュヌ神であり、千の目を持つ方であり、天帝であり、究極であり、甘露であり、月神(ソーマ)であり、最高に崇められるお方！

あなたは、慶ばしい時(=ムフルタ)であり、ヒンドゥー歴の「日」(=ティティス)であり、大変に短い時間(=ラヴァ)であり、クシャナ(=約4分間)であられる。あなたは、シュックラ(新月の翌日から満月へまでの期間)であり、バフラ(満月の翌日から新月までの期間)であり、カラー(8秒間)であり、カーシュター(約0.25秒)であり、トゥルティ(さらに短い瞬間)であり、年であり、季節であり、月であり、夜であり、昼であられる。

あなたh、多くの山と森を持つ美しい大地であり、暗闇を晴らす太陽のある鮮明なる空であられる。あなたは、うねる大波を持ち、巨鯨(ティミンギリ)、鯨(ティミ)、鰐(マカラ)そして各種の魚類達が住む大海であられる。あなたは、誉れであり、賢者や偉大なる瞑想の聖仙により崇拜されるお方。祭祀にて聖なる祈願とともに捧げられるソーマ酒とギーを食するお方。常に果報を望むブラーフマナ(僧)により、祭

祀にて礼拝されるお方。

おお！比類無き強力な神、ヴェーダ聖典の中で讃えられるお方。それゆえ、祭祀に従事する熟学のブラーフマナ(僧)は、入念にヴェーダンガ(ヴェーダ聖典の補助学)を学ぶのである。」

このようにカドゥルーが息子の蛇達を守るためインドラ神を讃えると、馬に乗るインドラ神が、黒雲の群れで空の全てを覆った。彼は、雲々へ「命と恵の雨を降らせ！」と命令した。

雲々は、雷の光と共に有り余るほどの雨を降らせた。恐ろしい唸りをあげる雲によって、絶え間ないほどの雨が降り、空はあたかも世紀末のようであった。無数の波、雲の深い轟音、雷鳴、暴風、波濤が、豪雨で引きおこされ、空は狂気に満ちて踊り狂った。

このインドラ神の恵みの雨により、カドゥルーの息子の蛇達は、救われこの上なく喜んだ。世界は水で溢れ、冷たく清らかな水は、地下の国にさえも届いた。そして、大地には、豊かな水に溢れ、海、川、湖などができた。

カドゥルーと息子の蛇達は、ともにラーマニーヤカという名の島へ到着した。この島は、天界の設計士ヴィシシュヴァカルマナー神により、鰐類(マカラ)の住処として割り与えられていた。

その島はまさに楽園であり、美しい森が広がっている。海に囲まれ、鳥の囀りが鳴り響き、様々な花と果実をつけた美しい木々、魅力的な神々のものと思われる大邸宅や沢山の蓮花の池、澄らかな水で飾られた美しい湖、甘い香りの風が、さわやかに吹いていた。

蛇達は、大いに楽しみ、そして、強大な力を誇る聖鳥ガルーダへ再び命令した。」

「次は、俺達を、澄んだ水のある他の美しい島へつれてゆけ！ガルーダよ！お前は、空を飛び多くの美しい国々を見てるんだろ。」

(いいかげんにして欲しいものだ。)

ガルーダは、理不尽に次々と命令されるのに絶えかねて、母ヴィナターへ聞いた。

「おお！母上、何故ゆえに、私は、この蛇達の命令に従わねばならないのですか？」

「すまいね、あなたにとっては、不運としか言えないね。私は、カドゥルーの召し使いとなってしまうの。蛇達が私を欺き、その賭けに負けたの。そして、約束通り召し使いとなるはめに…。」

その理由を聞き、聖鳥ガルーダは、母を哀れみ蛇達へ懇願した。

「おお、蛇達よ！私に教えてくれ！何を持ってくれば、どんな知識を得られれば、あるいは、どんなことをすれば、私と母は、束縛から自由になれるのかを。」

彼が訪ね、蛇達は答えた。

「甘露を力づくで、俺達へ持って来るのだ！聖鳥よ！そうすれば、お前達は、奴隷から解放されるであろう。」

聖鳥ガルーダは、甘露を探しに飛び立つ

蛇達から甘露を持ってくれば解放されると言われた彼は、そのことを母ヴィナターへ話した。

「母上！私は、甘露をここへ持って来るために出発します。しかし何

か食べ物か、ほしいのです。どこで得られるか、私に教えてください。」

「そう！気をつけておゆきなさい！食べ物であれば、遠い海の真ん中にニシャーダ族の住処があります。何千というニシャーダ族を食べ、甘露を持っていらっしやい。

でも、ブラーフマナ(僧)を殺してはいけませんよ！それだけは、心にとめておきなさい。ブラーフマナ(僧)は、万物の中でも殺すべき者ではありません。彼らは、まるで火のような者。怒った時には、火のように、太陽のように、毒のように、あるいは鋭い武器のようになります。ブラーフマナ(僧)は、万物の導師だと言われています。これらの理由から、ブラーフマナ(僧)は、全ての者達から崇められているのですから。おお！息子よ！お前がいくら怒りに満ちても、決して彼らを死に至らしめることがあってはなりません。ブラーフマナ(僧)への敵意はどんな状況であってもふさわしくないのです。おお！汚れのない者よ！火も太陽でさえも苦行を重ねるブラーフマナ(僧)が怒った時ほど、焼き尽くすことはかないません。お前は、次のような兆候により、善良なブラーフマナ(僧)を知らねばなりません。ブラーフマナ(僧)は、万物の中で最初に誕生した者、四種の分類(ヴァルナ)の中で最高のもの、全ての者の父であり、長であり、導師なのです。

ああ、息子よ！マルタ神が、お前の羽を護り、月神と太陽神が、お前の背を護らんことを願います。アグニ神は、お前の頭を、ヴァス神達が、身体全体を祝福せんことを！神々と共にこの私も、息子であるお前の吉を真に願っていますよ。さあ行きなさい、息子よ！安全に、お前の目的を全うしなさい。」

母の祝福を受け聖鳥ガルーダは、賦与された強力な力で、羽を拡げ空へ飛び立った。

聖鳥は、腹ごしらえのため、まずはニシャーダ族のもとへやって来た。そして、彼は、死を司るヤマ神のように、ニシャーダ族を破壊するよう首をもたげた。壮絶な粉塵が巻き上がり、空が覆われた。鳥類の王ガルルーダは、巨大な口を開けて、ニシャーダ族の逃げ道を防ぐと、恐怖で見境を失ったニシャーダ族が、その口の中へ飛び込んだ。森の木が大嵐でゆれ、ニシャーダ族は、嵐で巻き上がる風塵で目がくらみ、蛇食いガルルーダの拵げられた口へ入って行ってしまったのだ。

甘露を求めるための腹ごしらえとして、聖鳥ガルルーダが、ニシャーダ族を悉く食い尽くしたと思われたその時である。一人のブラーフマナ(僧)が、巻き添えをくらい彼の妻と一緒にガルルーダの喉へ入ってしまった。すると、そのブラーフマナ(僧)は、焼き炭のように聖鳥の喉を燃やし始めた。偉大なる鳥は、彼に言った。

「おお！最高のブラーフマナ(僧)よ！すぐに、私の口から出てくれ。さあ、君のために口を開くから。私は決してあなたのような者を殺してはならないと教えられている。たとえ、その者が、いつも罪深い行爲をしていたとしても。」

「ガルルーダよ！頼みがある。ニシャーダ族である私の妻も、私と一緒に、外へ出しておくれ。」

「承諾した。とにかくあなたと共にそのニシャーダの者をつれて、すぐに外へ出てくれ。私の腹の熱で消化される前に、一刻も遅れず、ご自身をお救いなさい。」

そして、ブラーフマナ(僧)は、そのニシャーダの妻と一緒にガルルーダの口から外へ出た。彼は、ガルルーダに感謝と祝福をした。

腹を満たしたガルルーダは、満足し、羽を拵げ、空へ飛び立った。

すると自分の父、聖仙カシャパの姿を地上で目にした。聖仙に呼び止められ、ガルーダは、礼儀正しく挨拶をした。

「息子よ！調子よくやっておるか？毎日、十分な食事をしているか？お前に相応しい大量の食べ物が、人間の世界にあるか？」

「はい、父上。母上も元気でおりますし、もちろん兄のアルナと私も壮健であります。しかし、父上、私は、十分な食事を得ておらず、故に、私の幸福は、未だ満足してはおりません。母と私自身の自由を得るため、蛇族達から甘露を持ってくるよう条件をだされましたが、簡単ではありません。しかし、私は、今の束縛から母を解放するためにすぐにでも甘露を持って来なければなりません。甘露を得る前に腹ごしらえをしたいと望んだ私に母は、ニシャーダ族を食するよう命じました。私は、幾千という彼らを食べ尽くしたのですが、空腹は鎮まりません。父上！私にもっと他の食べ物を教えてください。それを食れば力づくで、甘露を持ってこられるようなものを。私の飢えと渴きを鎮めることのできる食べ物をどうかお授けください。」

「…そうか、ならば、奴らのことを教えるでしょう。お前の面前に見るこの湖は、大変に神聖なものだ。それは、神々の領域としても知られている。そして、そこには、一頭の象がおる。その象は、顔を常に湖の下を向け、前世において兄である亀を水の中で追いかけて、かれらの因縁から常に怒りに満ちて争いあい引きずっておる。

まず、私は、お前に、彼らの前生での敵愾心について詳しく話しましょう。私から真実の物語を聞くがよい、ここに、彼らがいるのが、まさにその証拠なのだからね。

果てしない因果、輪廻

それは遙か昔のことだ…。ある所に偉大な聖仙がおった。その名をヴィヴァーヴァスという。彼は、大変に怒りっぽい性格であった。彼には、弟がおり、名をスプラティーカといった。弟もまた、兄と同じように短気な性格であり、強い聖仙であった。弟である聖仙スプラティーカは、父の遺産を兄ヴィヴァーヴァスと共有するのを好まず、いつも、分配しようと兄に話していた。

幾日が過ぎたある時、聖仙ヴィヴァーヴァスは、物分かりの悪い弟に怒りをこめて話しを切り出した。

「愚かなことだぞ、財に目がくらむのは！多くの者達は、遺産を分配しようと望むが、分配するやすぐに、財から生じる無分別から喧嘩を始める。友の姿をした敵達が、無智であり利己的な兄弟の間を引き裂く原因となるのだ。欠点を指摘し、喧嘩を強め、一人ずつ倒れてゆく。完全な崩壊が、すぐに襲いかかり、兄弟達を離間させる。故に、賢者は、決して兄弟間で分配を認めない。分配とは、聖典と導師に、いかなる敬意も払わないことを意味するのだ。まさにお前のように、私の忠告を無視し、分配の思念に推され、遺産を分けたいとする者は、次世には象となるだろう。」

弟は、兄から象に生まれ変わると呪われたのだ。負けずに弟は、兄へ言い返した。

「ならばあんたは、水亀になるだろうよ！」

愚かにも、聖仙ヴィヴァーヴァスと聖仙スプラティーカの兄弟は、互いに呪いあった為、今、水亀と象として、そこに生きている。彼らの怒りの性により、愚かな動物になったのだ。両者は、敵愾心に束縛されておる。この湖で、その力と体重を誇り、巨大な創造物たる両者は、

昔からの敵愾心に、今なお、囚われているのだ。

見よ！立派な象が湖にやってくる。彼の咆吼を聞き、巨大な水亀が起き上がる、乱暴に湖の水を掻き乱しながら。それをみて象は、鼻を巻き、水の中へ突進する。もの凄い強い力の象が、彼の牙、前部の長鼻、尻尾と足で荒々しく、多くの魚がいる湖の水を蹴散らす。これまた強力な水亀は、その頭を持ち上げ、闘いに挑む。

息子よ！ガルーダよ！これらの動物を食ってしまえ。闘いに狂い、お互いを殺し合うばかりの者達を！そして、お前が実行したいと思うその務めを甘露の獲得を達成するがよい。巨大な山のような恐ろしい象と雲のような巨塊を食らえ、行け！ガルーダよ！そして、甘露を持ってくるのだ！

おお！卵から生まれたガルーダよ！お前が、神と闘う時には、幸福がもたらされんことを祈る！あふれんばかりの水壺、ブラーフマナ（僧）、雌牛、他の幸いなる物が、おまえに祝福を与えるであろう。その強靱な神との闘いにおいて。リグ・ヴェーダ聖典、ヤジュル・ヴェーダ聖典、サーマ・ヴェーダ聖典、神聖なる供物のギー、全ての神話、全てのヴァーダ聖典がお前の強さとなるであろう。」

父、聖仙カシャパから、そのように告げられ、聖鳥ガルーダは、湖へ行った。そこは澄んだ水であふれ、様々な鳥達があたりを飛んでいた。その光景を一瞥して、父の言葉を思いだし、偉大なる鳥は、素速く象と水亀をかぎ爪に掴み、空へ高く舞い上がった。

しかし、困ったことにこの巨大な象と水亀を食べる場所が見つからない。ガルーダは、適した場所を探し求めアランバと呼ばれる聖地に

たどり着いた。そこには、沢山の神木があった。しかし、ガルーダの羽が起こす強風に打たれると、神聖な木々は、恐怖で震え始めた。

聖鳥は、仕方なくそこを避け、丈夫そうな他の木々へ向かった。遂に聖鳥は、爪で捕んでいる象と水亀を置けそうな巨木群を見つけた。その中には、ものすごく大きなバニアンの木があった。

巨大なバニアンの木は、ガルーダへ告げた。

「100 ヨーjanya (120km)にも広がる、私のこの大枝に留まりなさい。そして、象と亀を食べてはいかがか。」

山のように巨大なその木は、数千の鳥達の住処でもあった。ガルーダは、そこへ羽を休めて降りてみた。すると大枝は、聖鳥を支えきれずに折れてしまった。

その折れた枝が、あやうく落下しそうになった時、ガルーダは、嘴で枝を捕えた。ガルーダが、その枝に目をこらすと、ヴァーラキリヤと呼ばれる指と同じほど小さな聖仙達が、その枝に頭を下にして吊り下がって苦行をしているのを見つけた。

「偉大なる苦行をする小さな聖仙達の、命を奪ってはならない。もし、この枝が、地面に落ちれば、小さな聖仙達は、命を落としてしまわれるだろう。」

そう考えたガルーダは、自然と力が入り、その足に捕らえている象と亀をさらにしっかりと掴み、嘴には、聖者が苦行をしている枝をしっかりとくわえ、両羽を拡げて空へ再び舞い上がった。

小さな聖仙ヴァーラキリヤ達は、神の力を凌駕したガルーダを見

て驚きにあふれ、その素晴らしい鳥に名前を付けた。

「この偉大なる鳥は、その羽に大変な重荷を持って飛ぶゆえ、鳥類の最高のも、蛇を食らうものとして、ガルーダと呼びたもうぞ。」
(※ガルーダの語源は、「グル」+「ウツウ」=飲み込む者の意。)

ガルーダは、爪に象と亀、口に聖仙達をのせた枝をくわえ、どこか落ち着ける場所を探しながら空を進んだ。結局、彼は、ガンダマーダナと呼ばれる、山類の中でも最高の山へ向かうことにした。

すると偶然に、そのガンダマーダナ山で、聖鳥ガルーダは、父、聖仙カシャパが、苦行に一心専念している姿を見た。

二人は再会を喜び、ガルーダの状況を理解し助言した。

「息子よ！事を急いではならぬ。さもなくば、お前は、苦悩を背負うことになるぞ。まずは、嘴に加えた枝で苦行している聖仙ヴァーラキリヤ達を守りなさい。彼らが怒れば、お前は焼かれてしまうだろうから。」

聖仙カシャパは、息子のために枝に逆さ刷りになる苦行を邪魔されてしまった小さな聖仙ヴァーラキリヤ達に許しを求めた。

「おお！偉大なる聖仙ヴァーラキリヤ達よ！聖鳥ガルーダの誕生は、万物の幸福のためである。彼は、偉大なる行為を達成しようとしておるゆえ、どうか彼に許しを与えてくれたまえ。」

小さな苦行者達は、輝かしい聖仙カシャパの言葉を聞き入れ、これまで、自分達がぶら下がって修行をしていた枝を捨てヒマラヤ山脈で修行を続けることにした。

聖仙達は去ったが、聖鳥ガルーダは、枝はまだくわえたままであった。その詰まった声で、父、聖仙カシャパへ聞いた。

「ありがとう父上！でも、私がかわえているこの枝は、巨大です。私が何も考えずに枝を放せば、きっと災難が広がります。この木の枝をどこへ放したらいいでしょうか？偉大なる聖仙カシャパ、ああ父上よ！人間がいない安全な場所を指示してください。」

聖仙カシャパは、ガルーダに無人の山を告げた。そこには、多くの洞窟があり、谷が深く、常に雪で覆われ、常人には近寄ることもできない、想像も及ばない山であった。偉大なる鳥ガルーダは、安心して嘴から巨大な枝を放ち、象と亀を食して腹を満たし甘露を求めて旅立った。

ガルーダに怯えるインドラ神や神々

さて、ガルーダの求める甘露は、今一体どこにあるのか？乳海の攪拌では、ダヌワンタリ神が水瓶に入った甘露を持って現れた。アスラ族に一度は奪われたものの、ヴィシュヌ神のおかげで、それは神々のもとで守られ、一部は人間界へも渡ったとされている。

ガルーダが、いよいよその甘露に迫ってくると、空からは、隕石群が降り注ぎ、神々の装飾品は輝きを奪われ、素晴らしい世界は、暗黒の破滅の様相に染まった。狼狽した神々同士は、罵り合い、仲間同士で意味の無い戦いを始めた。このような混乱は、これまでの歴史にまったく無い。狼狽する神々の王インドラ神達は、神々の導師、聖仙ブルハスパティに訴えた。

「おお我が導師ブルハスパティよ！なぜこれらの凄まじい災いが、突然起こっているのでしょうか？」

聖仙ブルハスパティは答えた。

「インドラ神よ！それは、見えざる因果によるものと言えよう！お前がその昔、あの輝かしい聖仙ヴァーラキリヤの苦行を邪魔したのだから。そして、この眼前の混乱は、聖仙カシャパとヴィナター夫人の息子、意のままに万物の形をまとうガルーダが、甘露を奪いに来ているからなのだ。ガルーダの無敵の強さは、お前に匹敵するからな。」

インドラ神は、聖仙からガルーダが迫っているのを聞き、身震いした。そして、甘露の守護者達へ自身の任務を全うするよう鼓舞した。

インドラ神の因果応報とは

ところでインドラ神の犯していた過ちとは、如何なるものであったのか？それは、次のようなプラーナ(古物語)に語られている。

その昔、創造神ブラフマンの創造物の誕生を願う思いから聖仙カシャパが誕生した。そして、その願いのもと、聖仙カシャパは、祭祀によって、神、悪鬼、人間、等万物の創造を担った。その聖仙カシャパの祭祀崇高な祭祀では、神々や他の聖仙達によって、護摩木を集め持ってくるなど、色々な奉仕がなされていた。

そんなある日、いつものように護摩用の薪(まき)を聖仙カシャパから頼まれたインドラ神は、その力で、山と同じほどの重さの木をなんの苦労も無く集めて持ってきた。

インドラ神はその途中で、身体が人間の親指と同じ程の小さな聖

仙達が、みんなで一緒にパラージャ草の茎を一本運んでいるところを見かけた。聖仙ヴァーラキリヤ族と呼ばれる彼らは、食物を摂取しておらず、痩せて、非力であった。歩く時は、上体をかがめており、道路にできた牛車の足跡に落ちた時には、とても困ったものだ。インドラ神は、彼らを見てあざけり笑い、頭越しに跨いで通り過ぎ、ひどく侮辱した。

小さなヴァーラキリヤ聖仙達の心は、大変な怒りと悲しみで溢れた。そして、インドラ神に恐怖を与える出来事が起こるよう崇高な祭祀を始めた。小さな素晴らしき聖仙達は、祭祀の火にギーを捧げ、大きな声でマントラを唱え次のように祈った。

「全ての神々の王、インドラの座に、その座を脅かす者が、もう一人現れるであろう。その者は、意のままにどこへでも行ける能力を備え、欲するままの威力を持ち、今のインドラ神へ恐怖をもたらすであろう！おお、創造神よ！どうか、インドラ神よりも100倍強く、心と同じほど素速いものを誕生させたまえ！」

インドラ神は、そのような祭祀が行われたことを聞き、大変に驚いた。そこで、聖仙カシャパへ自分の守護を頼みに行った。

聖仙カシャパは、インドラ神様からこの全てを聞き、早速に事の詳細を聖仙ヴァーラキリヤ達のもとへ出かけた。

「神々の王インドラに不幸が起こることを祈ったのは、本当かね？」

「その通り、そして、それは、成就しております。」

「しかし、現在のインドラ神は、創造神ブラフマーにより三界の王として任命されておる。ヴァーラキリヤ聖仙達よ！皆様方は、もう一人の王インドラを創造されるおつもりなのか？考え直されよ、創造神ブ

ラフマーの言葉を反故にははいけなんでしょう。その上で、この私もまた、皆さんの望みが無駄にならないようにしたい。そこで、私は、祭祀の成就と創造神ブラフマーの意向が両立するよう提案し、お祈りさせて戴きたいと思っています。『偉大なる威力を賦与された、羽をもつ鳥類のインドラが、鳥類の王が祭祀の成就として顕れますように』と！皆さんを侮辱したことをインドラ神は、反省しております。どうか、慈悲を与えたまえ。」

「おお！聖仙カシャパよ！我々のこの祭祀は、王＝インドラを誕生させるものである。それは同時に、『あなたのもとへ生まれる息子』という意味でもあります。この願いと成就を承諾戴けますように祈ります。これについて、あなたが、良いと思われることをなさってください。」

小さな聖仙ヴァーラキリヤの祭祀は、成就した。聖仙カシャパとヴィナターに、鳥の王として、二人の息子が誕生したのだ。二人は、羽を持ち、意のままに移動し、欲するままの姿を取る力を持つ偉大なる英雄となって、三界の全てから尊敬を受けた。インドラ神も自分の愚かな言葉が聖仙ヴァーラキリヤを怒らせてしまったが、自分の王の座を脅かす祭祀が、鳥の王を生む祭祀として成就するように取り計らった聖仙カシャパに感謝しひとまず安心した。

いよいよガルーダが甘露に迫る

とうとう鳥類の王、巨大なガルーダは、甘露を守る神々の前に現れた。神々は、その姿を目の前で見て、恐怖に震え手に持つ武器も揺れ動いた。守護神のバウマナ神も無敵を誇っていたが、鳥類の王ガルーダの嘴、かぎ爪、羽によってたたきつぶされ死んだ。その羽は、

巨大な嵐を起し粉塵を舞わせ全世界を暗闇へと包んだ。辺りは埃にまみれ、甘露の守護神達は、凄まじい粉塵にガルーダの姿を見つけれない。聖域を揺さぶり、巨大な羽と鋭い嘴で神々を次々となぎ倒した。風神をはじめ神々は、防戦一方であった。さらにガルーダは、飛びながら自らの姿を炎と変え神軍を蹴散らした。ガルーダに痛めつけられ、サーディヤ神群は、半神ガンダルヴァ達と東方へ、ヴァス神群は、ルドラ神群と南方へ、アーディティヤ神群は、西方へ、そしてアシュヴィニ神群は、北方へ、逃げ、偉大な神々が退却したのだ。

鳥類の王ガルーダは、囲り一面に燃え上がった炎を消すため、810もの口を作りだし、その口で大量の川を飲み、それを一気に吐き出して消火した。そして、火が消えると、甘露のある場所に入ってゆくために、ガルーダは、ものすごく小さな身体にその姿を変えた。

ガルーダが、暗い道を進んでゆくと、なにやら仕掛けが見えた。それは、甘露の前に置かれ、尖った刃がものすごい速さで回転していた。神々が作った装置は、近づく者を切り刻むように準備されていた。ガルーダは、足を止め、瞬間に自分の身体を小さくし、円盤の輻の小さなすきまを通り抜けた。さらにその円盤の奥には、甘露の番をする二匹の大蛇がいた。雷のような舌を持ち、火炎のように燃えあがり、比類なき力を漂わせ、顔と目が炎を発し、猛毒をもち常に憤怒していた。目は、まばたきせず、二匹のどちらかに睨まれた者は、瞬間に灰と化してしまうだろう。ガルーダは、粉塵を巻き起こし、大蛇の目を覆って見えなくし、切り刻んだ。

ついにヴィナターの強力な息子、ガルーダは、甘露を手にした。安堵の間もなく、すぐに取り上げ羽を広げて飛び上がり、甘露を守っていた神々の忌まわしい道具を嘴で粉々にして去っていった。

ガルーダは、甘露を手にしても、自分はそれを飲まなかった。疲れを認めず一心に母のもとへ急ぐガルーダ！帰路の途中、ガルーダは、空中でヴィシュヌ神に出会った。ヴィシュヌ神は、自我を捨てた彼を褒め称え言った。

「私は、お前に恩恵を授けたい。何か望みがあれば言いなさい。」
聖鳥ガルーダは、言った。

「私は、あなたの上に留まりたいのです。そして、甘露を飲むこと無く、不死身であり病からも解放されたいのです。」

ヴィシュヌ神は、ヴィナターの息子、鳥の王ガルーダへ言った。

「そのように、なろう。」

自分の二つの望みが叶い、聖鳥ガルーダは言った。

「ありがとうございます。私は、あなたへお返しをしたいのです。」



「そうか、では、私の乗り物となってくれるかな。もちろん、そうなれば、『私の下』となって、お前の願いと異なってしまう。故に、お前を旗標として掲げよう。そうすれば、上に留まりながら、私の乗り物にもなれよう。そのように、私の上に留まりなさい。」

ガルーダは、喜んで承諾した。

ヴィシュヌ神との約束の後、母を救済するために風のごとく、帰路を急いだ。

その途中、甘露を追ってきたインドラ神がガルーダめがけ襲い掛かり、彼の武器、金剛杵ヴァジラユダを打ち振るった。しかし、そんな攻撃も笑いながらガルーダは、すがすがしい言葉を放った。

「無駄なことは、おやめください！インドラ神よ！私が、この羽を一枚落としても、あなたには、その端さえ見ることはできますまい。あなたの金剛杵で撃たれても、私は、わずかな痛みも感じなかった。そう！力の差は歴然なのです。」

こう告げると、ガルーダは、自分の羽を一枚投げ捨てた。

聖鳥ガルーダから投げ捨てられた美しい羽を見て、万物は喜びの声をあげた。

「おお！この鳥を『スバルナ(=美しい羽を持つ鳥)』と呼ぼう！」

万物が何の疑いもなく賞賛することに驚き、インドラ神は、やはりガルーダは、偉大な存在に違いないと感心した。

「おお、鳥類の王よ！私は、お前の力の極限を知りたい。そして、また、お前と永遠の友情を結びたいと思う。どうか、その甘露を持ってゆく前に私と話しをしてくれないか？」

「インドラ神よ！わかった、あなたが望むように我々の間に友情を結ぶとしよう。だが、私の力が優れており、何者をも凌駕するとわかってくれ。賢者は、自身の力や自身の取柄を声高に話すことを認めないものだ。だからこそ、友情を結ぼうと望むあなたに謙虚さを求めるのだ。友よ、今、あなたが望むように友情を結び、私は告げるとしよう、理由無き自己賛美が、常に誤りであることを！インドラ神よ、山々、森、海、そして、あなたをも含めたこの地球は、私の羽一枚で支えられるのだ。動くもの、動かざるものを含めた全世界を同時に、そして疲れなどみせず支え続けられるのだ。」

「聖鳥ガルーダよ！あなたが、言ったことは全くその通りだ。あなたは、全てを可能にする。あなたの言葉を受けいれ誠意をみせよう、そして、永遠の友情を受入れておくれ。

我が友ガルーダ！聞いておくれ。もし、あなたが甘露を必要としないならば、どうか私に返してほしい。何故なら、あなたが、その甘露を与えた人と、我々は、争いを起こしかねんからね…。争いのもととなる危険なものなんだ、それは。」

「インドラ神よ！私が、甘露を奪い去ったのには、理由がある。私は、甘露を誰かに飲ませるわけではないのだ。ただ母を自由の身にするために、蛇族のもとへ持ってゆきたいだけなのだ。だから、インドラ神よ、私が蛇族の前にそれを置いたら、彼らが飲んでしまう前に、すぐに甘露を持ち去ればよからう。」

「おお、卵から生まれたガルーダよ！私は、あなたの言葉にとっても喜んでいる。おお、鳥類の王よ！お礼に、何か望みを言ってくれ。」

「それは、嬉しいね。私は、全てを成し遂げる力を持つが、しかし、インドラ神よ、私は、力強い蛇族が、私の食物となるように、あなたに願おう。」

「友よ！蛇族があなたの食物となるよう創造神もお認めになるだろう。そして、あなたの言葉通り、甘露が置かれた時、私は、それを持ち去るであろう。」

インドラ神と別れ、美しい羽を持つガルーダは、目にも留まらぬ早さで、母ヴィナターのもとへ向かった。そして、待ちかねていた蛇族達へ向かって高らかに叫んだ。

「さあ、これが甘露だ、持ってきたぞ！今からこれを聖なるクシャ草

の上に置くから、身体を清め、宗教的儀礼に乗っ取り、それを飲むが良い。お前達が私に頼んだことを、私は、やり遂げた。故に、約束通り、今日をもって、私の母ヴィナターは、自由の身だぞ。」

「わかった。そのようにしよう。」

ガルータは、クシャ草の上に甘露の入った壺を置いた。蛇達は、嬉しそうにそれを眺めると、甘露を飲むための準備として沐浴へ出かけた。

甘露から誰もが気を緩めた瞬間、インドラ神が突如現れ、クシャ草の上に置かれた甘露を奪い去り、天界へ持って帰ってしまった。

沐浴と日々の祈りや儀式を終えた後、蛇達は、甘露を飲むため、喜んで戻って来た。しかし、そこには、何も無かった。

「どうしたことか、なぜ無いんだ？」

蛇達は、いくら考えてもその答えを見つけられず、名残惜しそうに、その舌で甘露があった場所のクシャ草を舐め始めた。クシャ草は、持った手を切ってしまうほど、とても鋭い。以来、蛇族の舌先は、二つに割れたとされる。そして、甘露に触れたクシャ草は、聖なる食物と言われるようになったのだ。

輝かしいガルータの話を読み読むものは、その朗唱から優れた真価を得て、確かに天界へ旅立たれるであろう。

「マハーバーラタ アースティーカの物語より」